

武具で満たされた夢と聖フランシスコ
—信仰のまなざしで味わういくつかの気づき—
《聖フランシスコの生涯をていねいに味わいたい人向け①》

アッシジの聖フランシスコは、23歳の頃、騎士になることを夢見ました。計画を立てて実行しようと思いますが、道中、夜中に「武具に満たされた家または宮殿」の夢を見ます。神さまの働きかけが少しずつ明らかになってきます。

(1) なぜ、どのような騎士を目指したのか

聖フランシスコは、騎士になる夢を抱いていたと言われていました。どのような騎士に憧れていたのか、古い伝記からはあまり分かりません。

騎士に関連して、それまでの聖フランシスコを取り巻くいくつかの出来事や環境が思い起こされます。

- **庶民と貴族との衝突**：1199年から1200年にかけて、アッシジでは、庶民と貴族との間で衝突が生じ、貴族側はペルージャに避難しました。1202年には、アッシジとペルージャの間にあるコッレストラダにて、庶民中心のアッシジ軍と、貴族を含むペルージャ軍が衝突し、アッシジ軍は敗北しています。商人の力が増してきていたとはいえ、まだ貴族が優勢な時代です。このような中、騎士が含まれる貴族に憧れたのでしょうか。
- **牢獄で出会った騎士たち**：1202年にアッシジ軍がペルージャ軍に敗北した際、聖フランシスコは捕虜となっています。『三人の仲間たちによる伝記』4によると、聖フランシスコの牢には、騎士たちもいたようです。彼らとの交わりから何らかの影響を受けたのでしょうか。
- **庶民より上の立場への憧れ**：騎士は貴族に属し、聖フランシスコは裕福な商人の子どもとはいえ、「庶民」に属します。どのような感情の野心があったか分かりませんが、庶民より上の立場を目指していたことにはなります。ある程度、経済的に安定した生活を望んでいたのでしょうか。少なくとも、物惜しみせず気前よく与える騎士の姿勢に憧れていたかもしれません¹。
- **吟遊詩人の影響**：当時は、吟遊詩人と呼ばれる人々²が、南フランスのプロヴァンス地方から生じ、騎士や恋の物語を歌いながら各地をめぐっていました。吟遊詩人たちはイタリアも訪れていました。彼らの歌に親しみ中で、主君に対する忠誠を誓い、悪と戦い、弱い者を守る理想的な騎士に憧れていたのでしょうか³。

(2) 騎士になるための手段

具体的には、イタリア南部のプッリャ（ラテン語表記からの伝統的なカタカナ表記はプーリア）である戦いに参加しようとしていました。最初の伝記以降、いくつかの伝記には、一人の騎士に同行しようとしていたことが記されています。参戦して、手柄を立てて、騎士に叙勲してもらおうと考えていたようです。

プッリャでは、ブリエンヌのゴーティエが、ラヴェンナ公マルクヴァルトの軍と戦おうとしていました。

¹ Cf. フルゴーニ、キアーラ『アッシジのフランチェスコ—ひとりの人間の生涯—』（FRUGONI, Chiara, *Vita di un uomo: Francesco d'Assisi*, Giulio Eniaudi editore, Torino 1995 e 2001）三森のぞみ訳、白水社、東京2004年、p.31。中世ヨーロッパにおける騎士道の文学には、大きく四つの種類が存在していたようです。一つはシャルル大帝の戦いを中心としたカロリング朝の叙事詩、二つ目は恋愛を歌ったもの、三つ目はギリシャ・ビザンチン時代の逸話を時代に合わせて作成したもの、そして四つ目は十字軍に関するものです。 *Letteratura cavalleresca, in Medioevo*, Garzanti, Milano 2007 e 2017。

² 中世において人々を楽しませることを生業としていた人々で、道化師、大道商人、曲芸師、奇術師、踊り子、役者、楽器演奏者などが含まれていました。 *Giullari, in Medioevo*。

³ Cf. 川下勝『アッシジのフランチェスコ』清水書院、東京2004年、17-19。

ゴートイエは、教皇インノチェンツィオ 3 世の軍を率いていました。対するマルクヴァルトは、幼い皇帝フリードリヒ 2 世（ローマ王：1196-1198、1212-1250 年、シチリア王：1198-1250 年）の後見とシチリア支配を求めています。

フリードリヒ 2 世は、皇帝ハインリヒ 6 世とシチリア王女コスタンツァの間に生まれました。幼くして父を亡くしたフリードリヒ 2 世は、父親の後を継いで、シチリアを支配する立場にありました。

(3) プッリャに向けて出立した時期

ある研究によれば、1201 年から 1203 年にかけてプッリャでの戦闘は終わり、ゴートイエは 1204 年の初めにカンパーニャ地方に移動し、翌年にかけて戦闘を行っていました。1205 年 6 月の初旬には、騎士たちが参戦するためにスポレートに集まったようです⁴。

しかしゴートイエは、1205 年 6 月 14 日にサルノにて負傷し、亡くなりました。このことから、伝記がイメージしている戦闘は、ゴートイエの後を継ぐ、マンッペッコ公、パレアーリアまたはパリアーラのジェンティーレによる戦闘の可能性もあります。同じように、『三人の仲間たちによる伝記』5 におけるジェンティーレ公爵は、この人物を指している可能性があります。とは言え、ゴートイエによる戦闘という伝統的な解釈は、資料の観点から依然として信憑性が高いものと思われま。

こうしたことを踏まえ、ディ・フォンツォ師の詳しい研究では、1205 年の 5 月から 7 月にかけて、聖フランシスコはスポレートとアッシジの間を行き来したと考えられています。他の研究者は、1205 年の春、または夏と考えています⁵。

(4) 武具を納めた家または宮殿の夢

聖フランシスコは道中、夜に幻視または夢を見えています。最初の伝記をはじめ、いくつもの伝記がこのことを伝えています。それぞれが伝える主な情報を比較してみます。

伝記	示された形態	夢・幻視の中の場所	見たもの	示した者・聞いた声
1 チェラーノ	夜の幻視	家	武具（武器・鞍・盾・槍）	聖フランシスコとその騎士たちのもの
4 チェラーノ	夜の幻視	家	騎士の武具	聖フランシスコとその騎士たちのもの
ユリアノ	夜の幻視	家	武具	聖フランシスコとその騎士たちのもの
はじめり	夜の幻視	宮殿	武具・十字のしるしで飾られた盾	一人の人が示す (質問への答え) 聖フランシスコとその騎士たちのもの
2 チェラーノ	夜の幻視	宮殿	武具・美しい花嫁	聖フランシスコのもの
大伝記		宮殿	キリストの十字架を示す武具	神のいつくしみが示す (質問への答え) 聖フランシスコとその騎士たちのもの
三仲間	夜の幻視	宮殿	(美しい花嫁) 盾・騎士の武具	一人の人が示す (質問への答え) 聖フランシスコとその騎士たちのもの

*1 チェラーノ：チェラーノのトマス『祝福されたフランシスコの生涯』

*4 チェラーノ：『再発見された、祝福されたフランシスコの生涯』

*ユリアノ：シュパイエルユリアヌス『聖フランシスコの生涯』

*はじめり：『会のはじめりまたは創立』

*2 チェラーノ：チェラーノのトマス『靈魂の憧れの記録』

*大伝記：聖ボナヴェントゥラ『聖フランシスコの伝記』

*三仲間：『三人の仲間たちによる伝記』

⁴ Cf. TEMPERINI, Lino, *Francesco di Assisi. Cronistoria psicologia itinerario spirituale. Rivisitazione storica*, Neos Edizioni, Rivoli 2012, pp.42-43.

⁵ Cf. DI FONZO, Lorenzo, *Per la cronologia di S. Francesco. Gli anni 1182-1212*, Edizioni Miscellanea Francescana, Roma 1982, pp.57-58.

目につくいくつかの違いがあります。

・**幻視の中で見た場所**：『会のはじまりまたは創立』（1241年）以降の伝記には、それより前の伝記と比べると、「家」から「宮殿」へと変化しています。

・**見たもの**：武具があるのは一貫しています。

一方、チェラーノのトマス『靈魂の憧れの記録』と『三人の仲間たちによる伝記』には「美しい花嫁」も記されています（後者は「花嫁の宮殿」という表現。ただし一つを除いて他の写本には記されていません⁶）。

『靈魂の憧れの記録』に加えられたこの変化については、当時の靈的文学の特徴に沿いながら、聖フランシスコの交わした貴女清貧との契りのイメージを示しているとも言われていますが⁷、このような側面をあまりに強調するのを避けるべきという見解もあります⁸。

『三人の仲間たちによる伝記』において加えられた変化については、チェラーノのトマス『祝福されたフランシスコの生涯』⁷において、聖フランシスコがプッリャ行きを断念した後に、崇高な花嫁をめとることを仲間たちの間で宣言した出来事を反映しているとも言われています⁹。

また、『会のはじまりまたは創立』と聖ボナヴェントゥラ『聖フランシスコの大伝記』は、武具に十字架のしるしが見られます。後者には、「キリストの」ということばも見られます。このような変化によって、聖フランシスコが主に仕える者であることを「キリストの騎士」のような表現で示しているようです¹⁰。

・**幻視を示したもの**：チェラーノのトマスの伝記とシュパイエルのユリアノでは、幻視は漠然と示されています。他方、『会のはじまりと創設』『三人の仲間たちによる伝記』は一人の者によって幻視が示され、聖ボナヴェントゥラ『聖フランシスコの伝記』では神さまのいつくしみによって示されています。

これらの違い、とりわけ、武具に十字のしるしが見られるようになる変化には、聖フランシスコが武力によって人の上に立つ存在を目指すのではなく、封建制度のイメージを用いながらキリストに従う者になるというイメージを明確にしていたことがうかがえます。

《こんにちのわたしたちに照らして》

・**騎士のイメージの意味**：こんにちのわたしたちにとって、「騎士」のイメージは身近ではありませんが、君主に仕え、武力をもって君主や人々を守る立場にあることは想像できます。様々な伝記は、聖フランシスコとその仲間たちにこの騎士のイメージをあてはめていますが、それはこのような騎士ではなく、神さま、キリストに仕える者であることを示しています。

・**上に立つ者からあたたかくへりくだる者へ**：「騎士」は、他方では貴族であり、人々の上に立つ存在でもあります。ところが、聖フランシスコは、あたたかくへりくだるイエスさまのところに生かされるようになっていきます。武力・地位・名誉・富において人の上に立つのではなく、むしろあたたかくへりくだる者として生きることを目指すようになります。

・こんにちにおいても世の中では、学力、功績、業績、腕力、武力、財力、出自、地位、名誉、美貌など、何らかの形で力のある人が称賛されがちです。教会においても、洗礼を受ける人、奉獻生活者、司祭やそれらの新しい召命が増えること、宣教活動が活発になること、カトリック教会の事業体活動が拡大すること、社会にも教会が影響を及ぼすこと、など、何らかの形で力のあるイメージを理想と

⁶ Cf. *Francis of Assisi: Early documents. Volume II The Founder*, ARMSTRONG, Regis J., New City Press, New York, London and Manila 2000, p.70, n.b.

⁷ Cf. 同 p.245, n.c.

⁸ Cf. MICCOLI, Giovanni, *Francesco d'Assisi e l'Ordine dei minori*, Edizioni Biblioteca Francescana, Milano 2009, p.12.

⁹ Cf. *Francis of Assisi: Early documents. Volume II The Founder*, p.70, n.b.

¹⁰ Cf. SOLVI, Daniele (commento di), a *Gli esordi e la fondazione dell'Ordine e gli atti di quei Frati minori che per primi vi aderirono e furono compagni di san Francesco*, in *La letteratura francescana Volume II. Le vite antiche di san Francesco*, LEONARDI, Claudio (a cura di), Fondazione Lorenzo Valla, Arnoldo Mondadori Editore, 2005, p.566.

している部分があるかもしれません。これらのすべてが悪いわけではないでしょう。しかし、これらにあまりにもとらわれて、あたたかくへりくだるイエスさまのこころを大切にできないなら、悲しいことです。わたしたちの夢や願いを聖霊の助けによってありのままに受けとめ、神さまにおゆだねできたら。そして、どのような夢や願いを思い描くとしても、聖霊の助けによってその根底・中心に、あたたかくへりくだるイエスさまのこころを抱くことができたなら。

(5) 武具を納めた家または宮殿の幻視を聖フランシスコがどのように解釈したか

この幻視を聖フランシスコがどのように解釈したかについても、伝記の間に違いが見られます。

伝記	武具を納めた家または宮殿の幻視に対する聖フランシスコの解釈	問いかける幻視
1 チェラーノ	遠征計画の成功を確信した後、熱意が冷め、嬉しくなかったため、気が進まないまま出立を準備。その後、プッリヤ行きを断念し、神の望みを思いめぐらすようになる。	なし
4 チェラーノ	目覚めると、遠征計画について熱意が冷め、沈黙のうちに自分のうちで問いかけるようになる。神の望みにかたどられるようになる。友人に相談し、一人を好み、神の喜びに浸り、プッリヤ行きを断念。	なし
ユリアノ	目覚めると、遠征計画の成功を確信した後、熱意が冷め、気がすすまなかったため、プッリヤ行きを断念し、幻視が別のことを意味していると捉える。	なし
はじまり	神の霊に浸っておらず、世間一般の考えで幻視を捉え、偉大な君主になれると信じる。	あり
2 チェラーノ	世俗の考えにとらわれていたので、世俗の考えで幻視を捉え、騎士になれると信じる。	あり
大伝記	目に見える表面的なものを通して目に見えないものを捉える力がなく、神の計画が分からず、騎士になると信じる。	あり
三仲間	興奮し、世間の考えで捉え、偉大な君主に慣れると信じる。	あり

- ・ **別の幻視が記されている伝記の特徴**：『会のはじまりまたは創立』以降の伝記では、武具を納めた家または宮殿の幻視を記した後、スポレートにおける別の幻視（聖フランシスコに問いかける幻視）を見た出来事を記しています。これらの伝記において聖フランシスコは、武具の幻視を通して、騎士または立派な君主になれると信じています。（聖ボナヴェントゥラ『聖フランシスコの伝記』を除けば）聖フランシスコは世間の考えで幻視を捉えています。
- ・ **別の幻視が記されていない伝記**：チェラーノのトマスの二つの伝記（1 チェラーノ、4 チェラーノ）では、聖フランシスコは一時的に、成功を確信しています。シュパイエルのユリアノも含めて共通しているのは、熱意が冷め、遠征に気乗りしなくなったという点です。チェラーノのトマス『再発見された、祝福されたフランシスコの生涯』では、プッリヤ行きを断念する前に、自分のうちで問いかけ、友人に相談する出来事も記されています。

《こんにちのわたしたちに照らして》

- ・ **識別**：教会は長い歴史の中で、何が神さまの望みであるかを判断する様々な基準について考えてきました。主なものとしては、不安なときに選択・決断しないこと、選択・決断がイエスさまのあたたかなこころを矛盾しないこと、選択・決断した後に深い意味での落ち着きと喜びがあること、などがあげられます。そのような基準を経たつもりでも、わたしたちは自分の性格、体験、感情に狭い意味でとらわれて判断していることがあり、誤った選択・決断することがあり得ます。既に触れたように何らかの形で「力」に憧れて選択・決断してしまうときもあるかもしれません。
- ・ **視覚的イメージの有用性と限界**：武具を納めた家または宮殿の幻視は、文字通り、視覚的なイメージでした。視覚的イメージは、子どもから大人まで物事の内容を受けとめやすいものにしてくれます。聖フランシスコ自身も、書き物や伝記において視覚的イメージによるたとえを度々用いています。しかし、『会のはじまりまたは創立』以降の伝記では、聖フランシスコがこの視覚的イメージだけでは自分の歩むべき道を理解しなかったことを表現しています。
- ・ **司牧における分かりやすいイメージの限界**：一見分かりやすいように見えるものであっても、ほんと

うに大切なことを受けとめられない可能性もあります。教会における説教や講話では、分かりやすいたとえ、体験談を好み、本質を述べる際に生じる抽象的に思える表現を敬遠する人々もおられるかもしれません。そのことから、体験、たとえ、視覚的イメージを取り入れようとした結果、重要な本質をあまり伝えられなくなるときもあるかもしれません。

- どのような選択・決断をすとしても、どのような体験・たとえ・視覚的イメージを利用すとしても、あたたかくへりくだるイエスさまのこころを聖霊の助けによって最も大切にできたら。

(聖フランシスコ年記事 n.A)